

童話『青い魔法に気をつけて』

二十三回生 黒澤 琉美子

高原列車で、気楽なひとり旅をしていたぼくは、いつの間にか眠ってしまったようでした。

ガタンとゆれて目をさますと、まどの外一面が青くなっていました。

そうか、もう夕方なんだ。

ぼくは大きいのびをしながら、ぼんやり外を見ていました。空には、ほそい月が舟のように浮かんでいました。

その時です、ぼくがウサギを見たのは。

ウサギは空を飛んでいました。まるで、ほそい三日月から飛び出してきたように、ぼくには見えませんでした。そして、あっという間に谷のほうへすがたを消してしまっただけです。

「今、ウサギが空を飛んでいたぞ！」

ぼくが大声でさげぶと、まわりの人たちがざわざわと笑いました。

前の席で新聞を読んでいたおじさんが、じっとぼくの顔を見つめて言いました。

「そりゃあ、青い魔法だよ。昼と夜のさかい目におこる、宇宙の魔法だ。あんたは、ちよいとその魔法をかけられたのさ。ま、ウサギなど見なかったと思っただけだよ、無事だろうね」

おじさんはそれだけ言うと、また新聞を読み始めました。

その時、列車がちょうど駅に止まったのです。ぼくはもう矢もたてもたまらず、駅へとび降りてしましました。へウサギ谷」という名の、さびしい無人の駅でした。

うん、ウサギ谷だなんて、まさにぴったりの名前じゃないか。

ぼくは思いました。

けれど、ウサギの飛んで行った谷など、一体どっ

ちのほうなのか見当もつかないのです。

駅の裏の林に入って、きよろきよろしていると、ウサギ谷への古い道しるべが見つかりました。その矢じるしにしたがって、ぼくは草のおいしげった道を谷へ向かっておりはじめました。やがて道はなくなり、低いかん木の林を、がむしやらにつき進んでいきました。日はとつぷりと暮れ、ぼくはくたびれはてました。

もう、ウサギなんてどうでもいいよ。

駅にもどろうと思ったけれど、全く方角が分からないのです。それでも、のぼったりおりたりして、ますます道に迷ってしまいました。青い魔法のせいで、ぼくは死ぬまでここをさまよい続けるのかと、本気で心配しはじめたころ、前方に明かりが見ええました。〈月の家〉という名の古い旅館です。

「今夜、泊めてもらえますか？」

ぼくの声に、ちよう場の主人が顔をあげました。何と、頭に長い耳のついた本物のウサギです！

「今夜は満員だが、ざこ寝でよければ・・・」

めがねをずらして、ウサギの主人が言いました。

「あのう、ここはウサギの宿ですか？」

ぼくは、不安になってたずねました。

「もちろん、ウサギしか泊めないよ。ほうら、お客さんだってウサギだろうが」

主人は、かべの古ぼけた鏡をゆびさしました。

ぼくが鏡をのぞくと、確かにウサギがうつっているのです。でもみょうなことに自分がウサギなのが、あたり前のような気がしてきたのです。

旅館の二階は、大広間になっていて、沢山のウサギがえん会を開いていました。

月が欠けたらよう

行こうよ みどりのウサギ谷へ

月が満ちたらよう

帰ろうよ なつかしいあの月へ

ウサギたちは、陽気にはしゃいでいました。もちろんぼくもウサギですからね、いっしょにさわぎました。お酒が出されて、なにかうまい物を沢山食べないように思います。

目をさましたのは、はちみつ色の朝日が、ぼくの顔をまぶしく照らしたからです。がらんとした広間に、ぼくはたった一人でひっくり返って寝ていました。

ちよう場へおりて行くと、ねむそうな顔をした主人が、ソロバンをはじいていました。どこから見ても人間です。

「おじさん、ウサギじゃなかったの？」

「じようだんじゃないよ。一体なんの話かね？」

主人は、気むずかしそうな顔をしてめがねの奥から僕をにらむと、宿泊代をせいきゅうしました。え！っと思うほど高いものでした。

「でも、しかたがないですよね」道に迷って死んじゃうことを思えば。

僕は鏡をのぞいて、ぼくもふつうの人間であることをたしかめると、外へ出ました。旅館から駅へ、細い道がついています。

あれ、こんなに近かったのか。とにかく駅で列車を待とう。

ぼくはそう考えて駅に行きました。だれもない駅には、駅名かんばんだけが立っています。

〈ウツギ谷〉

おや、昨夜は確かに、〈ウサギ谷〉と書いてあったと思うけど・・・

ま、どっちでもいいよね。それよりこれからは、青い魔法に気をつけよう。

おわり